

安全で安心して生活できる社会の実現を目指して

総合的な学習の時間 担当 陰山 健・辻本 堅二

1. 主題設定の理由

本学では昨年度より小学校・中学校・高等学校の共同研究テーマとして、「自立し協同する力を育む教育 ―コミュニケーション力を基盤として―」を掲げ、実践に取り組んでいる。特に2年次である今年度は、小中高の12年間を見通し、子どもの発達段階を踏まえたカリキュラムの構築に向けた取り組みを充実させ、共同研究主題の達成を目指す。

特に「総合的な学習の時間」は専門性のある教科教育以上に異校種間の学習内容の系統性を強く意識する必要がある。学習指導要領の「総合的な学習の時間」の目標にある「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質や能力を育成するとともに、学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探究活動に主体的、創造的、協同的に取り組む態度を育て」るためには、校種間の密接な連携が必要であり、そうすることによりその効果はより大きなものとなるはずである。

従来池田キャンパスでは、小学校においては教育課程特例校「安全科」、WHOによる「International Safe School」、中学校においては「市民科」等による市民性の教育、高校においては「UNESCO 協同学校」(現 ユネスコスクール)といった取り組みを行ってきた。それぞれの取り組みで直接的に扱っているものは異なるが、「自己の生き方を考える」こと、そしてその前提となる「よりよい社会」の形成に向け、問題の解決に協同的に取り組む姿勢は共通した視点として必要不可欠なものである。そしてこれは「自立し協同する力」へとつながる。

具体的な学習活動は各校種の発達段階を踏まえて、小学校においては家庭・学校生活の中で、中学校においては地域社会での関わりの中で、高校においては国際社会での関わりの中で行われる。

上記の「よりよい社会」とは、言い換えればすべての人間が豊かに生きていくことができる社会である。我々は一人ひとりがかけがえのない存在であり、その我々が存在を保障されることによって初めて社会がその存立意義を持つ。我々の安全を脅かす様々な問題は改善、解決されなければならない。そうした安全で安心して生活できる社会は現代世代の我々だけが享受するのではなく、将来世代の人々にも同様に享受できるものでなければならない。つまりよりよい社会、豊かな社会、そしてその前提となる安全で安心して生活できる社会は持続可能なものでなければならない。そうした社会を構築していくことが求められるのである。

以上のことから、小中高共同研究において「総合的な学習の時間」の研究主題を「安全で安心して生活できる社会の実現を目指して」とすることとした。

ねらいとしては次の3点が挙げられる。

- ① 安全について学習する中で、危険を予知し、回避する能力を育む。
- ② 自分自身の安全を考えると共に、他の人にとっての安全や安心について考え、そのために行動できる姿勢を養う。
- ③ 安全で安心して生活できる社会の実現に向けて、主体的・協同的に取り組む態度を育成する。

そしてそれぞれの子どもの発達段階に応じ取り組みを系統的に行っていく。

2. 実践の概要

安全で安心して生活できる社会の実現は個人の努力だけでは不可能であり、そこでは協働作業、言い換えればコミュニケーションが重要な役割を果たす。コミュニケーション力については「自分の思いや考え、体験を様々な他者に伝わるような『ことば』で表現し、また相手の思いや考え、体験を自らのそれと重ね合わせて受容し、相互理解に向けた営みができる力」という共同研究の定義に基づくが、「総合的な学習の時間」においては、小中高の発達段階を踏まえて、個人・集団・社会の3つのレベルに分けて捉える。

これは発達段階（学年）によって、明確に分けられるものではなく、量的および質的な差異によって重層的に捉えられるものである。（図1）

図1

コミュニケーションのレベル		発達段階（学年）
個人	集団	小学校低学年 小学校中学年 小学校高学年 中学校1年生 中学校2年生 中学校3年生 高校1年生 高校2年生 高校3年生
	社会	

そしてコミュニケーション力を高めるための学習活動として言語活動を位置づける。これは学んだ知識・技能を用い、「言葉」を介して活用・探究していく学習活動である。そうした言語活動の系統性を明らかにするために次のような枠組みのマトリクスを作成する。（図2）

図2

コミュニケーション 題材	言語的コミュニケーション			非言語的 コミュニケーション
	読む	書く	話し合う	行動する
題材A				
題材B				

具体的なコミュニケーションは以下のようなものである。

読む……自分の身の回り・地域・社会の諸事象を読み解き、必要な情報・知識を獲得する。

書く……自らが調べたり気付いた事柄を整理し、まとめる。

話し合う……問題解決のために主体的、創造的、協同的に話し合う。

行動する……現在の状況の改善に向けて自ら行動する。

こうしたマトリクスの作成により、小中高12年間を見通したカリキュラムの構築を目指す。

【実践事例1】

＜授業者 辻本堅二＞

1. 対 象 第2学年
2. 題 材 リスク・コミュニケーション～大震災から学ぶ多様な視点の気づき～
3. 題材設定の理由

阪神・淡路大震災や東日本大震災をはじめとする数々の大震災では世界の中でも地震対策が進んでいる我が国においてさえ、多大な被害をもたらせた。とりわけ、東日本大震災では今までの震災に比べて類を見ない未曾有の大災害となった。

防災や災害対応は、ハード面はもちろんのことソフト面が重要である。そして、災害に備えたり、いざ被害に遭ってしまったときには、「自助」「共助」「公助」の3つの力が大切である。加えて、昨今これらの「自助」「共助」「公助」のバランスを求める声が強い。それは、公的機関による「公助」にのみ依存することから脱却し、自分たちの町は自分たちで守る「共助」および自分の命・財産は自分で守る「自助」の精神を涵養しその能力を高めていく必要があるというものである。

リスク・コミュニケーションとは「個人・機関・集団間での情報や意見の交換過程」であり、リスク問題に関して社会全体としてともに考えていこうというものである。リスク・コミュニケーションの中では共通の目標（課題解決）に向かって多種の対話が生まれ、共通の問題に対する異なる視点の交換があちこちで発生する。防災、災害対応の問題解決場面では、情報が不完全なために結果にリスクが存在する環境下で意思決定を下さなければならない状態である。特に災害時においては、情報の不完全性、リスクが内包した環境においては、1つの正解には到達しないまでも、問題の解決には多様な視点が必要であるという気づきが必要であると考えられる。

また、中学2年生は総合的な学習の時間においては、京都研修旅行の取り組みの中で国際理解、男女共同参画社会を考える中でちがいを尊重しながら多様な視点について学び、考えてきた。このような取り組みを踏まえ、安全・安心な社会の実現を目指して、起こりうる問題に対する課題を想定し、問題が起こった際に自らの問題として捉え、考え、行動できる姿勢を養いたい。

4. 題材の目標

大震災により起こった問題を自らの問題として考えるとともに、防災、災害対応での問題解決場面において、リスクが存在する環境下であっても様々な課題を把握し、多様な視点を考慮しながら意思決定し、行動できる姿勢を養う。

5. 評価規準表

よりよく問題を解決する資質や能力	学び方やものの考え方	主体的・創造的・協同的に取り組む態度	自己の生き方
自ら課題を把握し、その解決に向けての方策を追求している。	情報や問題点を正確に理解・分析し、根拠をもって考えをまとめている。	グループ内で協調しながら意見を出し合い、課題解決に向けて協力できている。	多様な視点を考慮し、自分自身の意思や行動に結びつけることができる。

6. 指導計画（全3時間）

- 第1次 大震災から学ぶ 1時間
- 第2次 リスク・コミュニケーション 2時間（本時は1時間目）

7. 言語活動のマトリクス

題材	コミュニケーション	言語的コミュニケーション			非言語的コミュニケーション
		読む	書く	話し合う	行動する
リスク・コミュニケーション	情報や問題点を正しく把握する。	課題解決に向けて根拠を明らかにしながらまとめる。	多様な視点を考慮し、よりよい解決策を話し合う。	日常または災害時に自らの考えで行動する。	

8. 本時

(1) 目標

- (i) 災害（大震災）時に、様々な立場に立ったとき、どのような対応をとるのかを根拠をもって考えようとする。（よりよく問題を解決する資質や能力）
- (ii) 課題を正確に把握し、自分のとる行動について根拠をもってまとめることができる。（学ぼうやものの考え方）
- (iii) グループ内で協力し、公正に防災ゲームに取り組むことができる。（主体的・創造的・協同的に取り組む態度）
- (iv) 防災ゲームを通して、他者の考えを推測し、グループ内での意見交流を通して多様な視点を学ぶ。（自己の生き方）

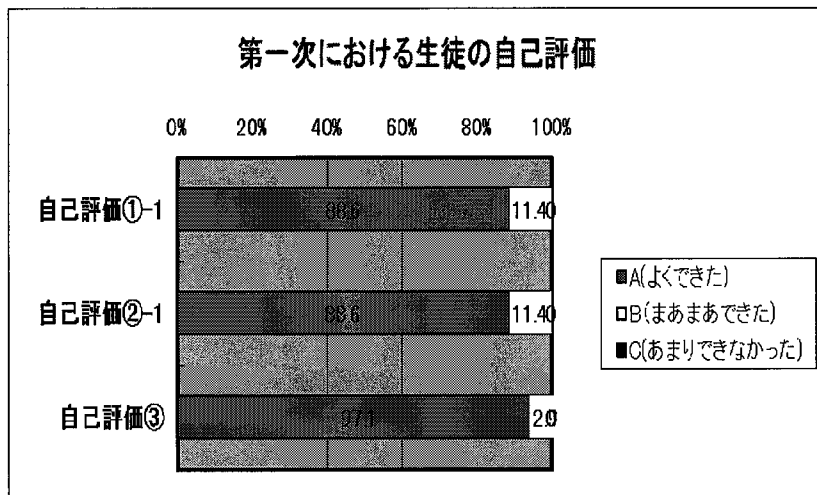
(2) 展開

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
はじめに	防災や災害対応に対する意思決定。		
説明	模擬ゲームを通して、防災ゲームの内容やルールを理解する。	勝ち負けを競うのが目的ではない。	評価(ii)
活動話し合い	<ul style="list-style-type: none"> ・ 提示された課題に対し、自分の意思およびその根拠を考え、多数派の意思やその根拠を推測する。 ・ 意思決定した根拠をそれぞれ出し合う。（数回繰り返す） 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 意思決定のための根拠を十分に考えさせる。 ・ 出し合った意見をグループ内で共有させる。 	評価(i)(ii)(iii) 評価(iv)
振り返り	振り返りをワークシートに記入する。	自分の考えの過程やその変化について認識させる。	評価(iv)
発表	振り返りを発表する。	共感できる意見を大切にさせる。	
おわり	課題解決において、多様な視点を考慮する重要性を理解する。		

9. 成果と課題

第一次の授業では、想定した問題に対して各自根拠をもって決断する。その後、班で意見交流をするワークに取り組んだ。はじめからこのワークを行うのではなく、大震災のメカニズムや被災地内、被災

地外での諸問題を考え、学習した上で取り組んだので、生徒の問題意識も高揚し、自らの問題として捉えることができた点では効果的であった。

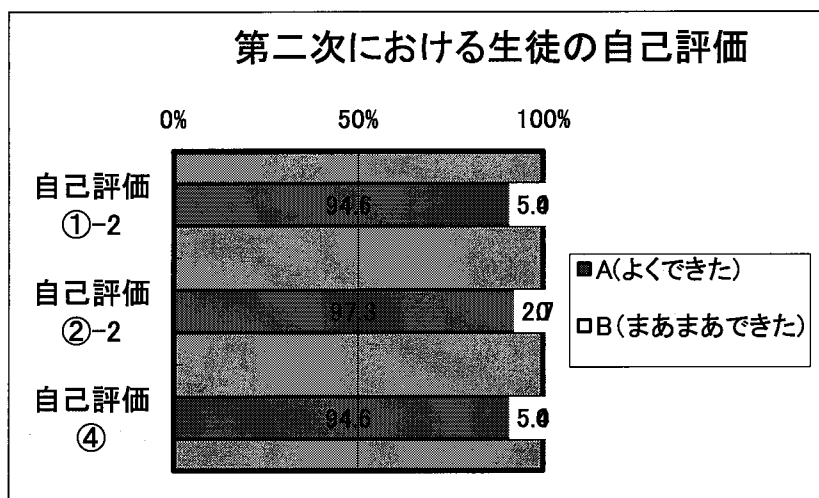
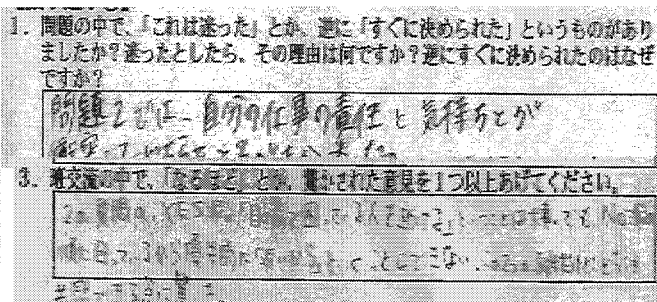
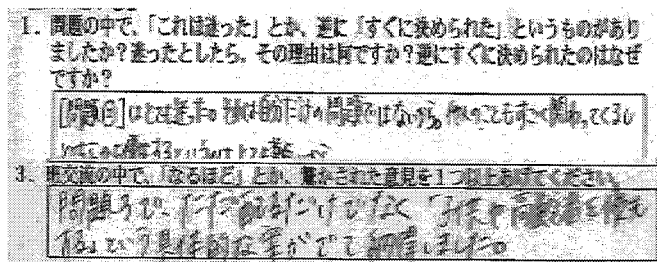


自己評価①-1 震災の際に起こる問題について、その立場に立って根拠をもって考え、決断することができた。

自己評価②-1 友達と意見を交流させ、自分とは違った視点や考えを学ぶことができた。

自己評価③ 東日本大震災や阪神・淡路大震災のメカニズムや発生した問題を考えることができた。

第一次の想定した問題の取り組みは、第二次の防災ゲームにつながるものである。ゲームの中で多数派の決断を予想することは、自然に多様な視点を模索することにつながる。そして、班の友達の意見を聞くことで、自分が漠然と模索したことが意識化される。さらに活動の振り返りを行う中で、内在化する迷いに気付き、自分とは異なる友達の視点に共感することで、新たな視点を獲得することができたようである。このように、「活動」「交流」「振り返り」の組み立ては多様な視点を学び、新たな視点を獲得する上で有効的であったと言える。

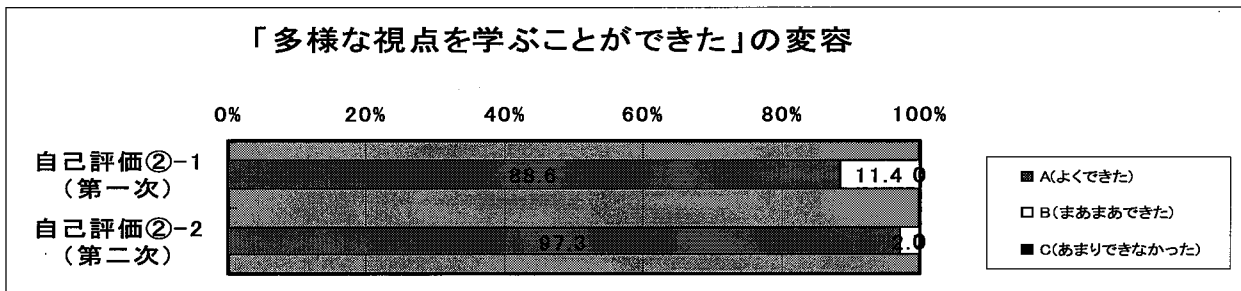
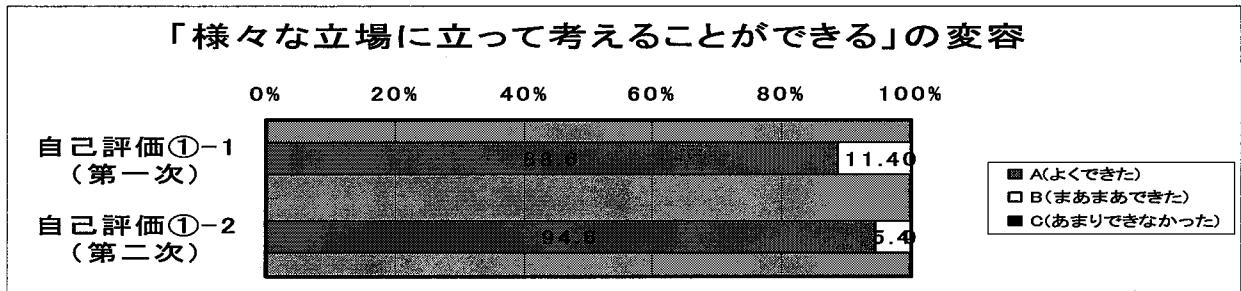


自己評価①-2 災害（大震災）時において、様々な立場に立ってどのような対応をとるのが根拠をもって考えることができた。

自己評価②-2 防災ゲームを通してグループ内の意見交流を通して多様な視点を学ぶことができた。

自己評価④ グループ内で協力し公正に防災ゲームに取り組むことができた。

また、ワークをくり返し行うことは、「様々な立場に立って考える」「状況の異なる諸問題を自らの問題として捉える」そして、より多くの「多様な視点を学ぶ」ことに有意義であったことが伺える



今後、大震災をはじめとする災害時に不完全で危険が内包した状況下において、決断を迫られる場面に遭遇する可能性は多々あると予想される。その際、多様な視点を考慮し、考え、行動ができる姿勢が求められる。それ故、日常的に様々な場面を想定し、継続的に協同的にくり返し訓練を行うことが必要になってくる。そして、その姿勢が安全で安心して生活できる社会の実現に直結していくものだと確信する。

【実践事例 2】

＜授業者 陰山 健＞

- 1. 対 象 第3学年
- 2. 題 材 避難所としての学校
- 3. 題材設定の理由

大規模災害が発生した場合には学校は地域住民の緊急の避難所となることが多い。実際、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震、東日本大震災等においても学校は避難所として重要な役割を果たしてきた。しかしながら避難所としての学校を考えた場合、必ずしもその防災機能は十分とは言えない。常日頃からハード面、ソフト面共に防災機能を整備していくことが求められる。

同時に震災の際、各地の避難所では教職員だけではなく地元の中学生・高校生がボランティアとしてその運営に携わる姿が見られた。懸命にボランティアに取り組む子どもたちの姿は、その活動のみならず人々を勇気づける役割も果たした。こうした活動は結果として、地域との関係づくりとしてもその効果が期待される。

学校の防災機能を高めていくことはもちろん行政並びに学校主導となるが、生徒達とその機能や自分達ができることについて考えていくことは、防災・ボランティア・地域との関わり等について意識付けていく観点からも重要だと思われる。特に自分自身はもちろん、他の人については地域社会

の安全や安心について考え、そのために行動できる姿勢を養うことは、持続可能な社会を築いていくために重要であり、そうした資質は市民として求められるものである。特に中学3年生は総合的な学習の時間の取り組みの中で、社会参加実習等で社会と関わる体験も重ねてきた。また人権学習等においても障がい者問題や男女共同参画社会、様々な差別問題も扱ってきた。こうした取り組みを踏まえて、持続可能な社会を築いていくために何ができるのか、考えていく一助としたい。

4. 題材の目標

避難所としての学校が備えるべき防災機能について様々な視点から考え探究し、自らはもちろん地域住民が安全で安心して生活できるような状況の実現に向け、行動できる姿勢を養う。

5. 評価規準表

よりよく問題を解決する 資質や能力	学び方やものの考え方	主体的・創造的・協同的に 取り組む態度	自己の生き方
自ら課題を見出し、その課題のよりよい解決を追求している。	公正な話し合い活動を通じて、根拠を明確にしつつ意見や考え方をまとめている。	他の生徒と協力して課題解決に向け、方策を探究しようとしている。	他者の多様な意見を受け入れ、自己との関わりを踏まえて捉えている。

6. 指導計画（全5時間）

- 第1次 避難所について 2時間
第2次 避難所としての学校 3時間（本時は2時間目）

7. 言語活動のマトリクス

題材	言語的コミュニケーション			非言語的コミュニケーション
	読む	書く	話し合う	行動する
避難所としての学校	諸資料を読み解き、学校が避難所となった際に、起こりうる問題点を見出す。	自らが見出した問題点の解決に向けて思考した内容をまとめる。	避難所に関わる様々な立場の人々としての視点を基に、よりよい方策を話し合う。	自分とは違う立場に対して共感する。

8. 本時

(1) 目標

- (i) 避難所としての学校の防災機能について、よりよい方策を考えようとする。
(よりよく問題を解決する資質や能力)
- (ii) 公正に話し合いができる。(学び方やものの考え方)
- (iii) 学校の防災機能について互いに協力してそれぞれの立場から捉えることができる。
(主体的・創造的・協同的に取り組む態度)
- (iv) 異なる立場の意見を受け入れ、互いに納得できるような話し合いができる。
(自己の生き方)

(2) 展開

学習過程	学習活動および内容	指導上の留意点	評価の観点
はじめに	避難所としての学校の防災機能について。		
話し合い ①	グループに分かれ、避難所運営に関するゲームを通して、それぞれの立場ごとに問題点や要望を出し合いワークシートに記入する。	それぞれの立場になりきって意見を出させる。	評価 (iii)
話し合い ②	4人グループを再編成し、話し合い①で出た問題点等を交流する。 よりよい方策の探究。	当事者として納得できるような方策を探究させる。	評価 (i)、(iv)
発表	グループ別発表	グループで話し合った事柄をクラス全体で共有させる。	
ワークシート	ワークシートの記入	話し合いが公正に行われたか評価させる。	評価 (ii)、(iv)
おわり			

9. 成果と課題

学校が避難所として機能するために何が必要かに関して、当初は高齢者や乳児がいる家族に対する配慮等、3~4程度の対処しか挙げられなかった。しかしゲームにおける色々な異なる立場の避難者とのやり取りを通して、ハード面・ソフト面共に様々な側面から捉えることができていた。「安全」について捉える際、自助・共助・公助の視点が重要であり、今回の授業は共助と公助をつなぐ位置付けになるが、その点からもゲーム内において、避難所運営側から考えることができたのは有意義であったと言える。(目標(i)および(iii))

(生徒のワークシート例・「学校が避難所として機能するために必要なものは?」)

看板などに外国語を添えておく
食糧や水の確保をすることができると避難の際確保しておく。そして避難の際
避難者の多い場所と他の校舎や食糧を積んだところ、カバンは避難場所と区別し
不足した場合は学校内に入れないようにする。
冬場には備えてストーブなどの暖房類を家まで出ている場所に保管する。
避難避難の際に多くのがんが発生するから、そのための避難する場所を決める。
この避難を助けるため

アライナーと椅子を教室に設置する。
食糧管理の部屋(鍵)→今は使われていない準備室(鍵)に入れ
この教室では、避難の際に4つの配置
携帯用トイレ、アルコール消毒液
外国人が来たら英語で話せるように指示し、校の前には
避難の指示板が貼ってある場所がわかるようにしておく

(生徒のワークシート例・「感想」)

感想
 今の所では右の人を一人だけだとして、
 上から下へと対応しては、自分から何かいって、
 実行した方がいいことだと、わかってきた。
 自分から何かいって、実行した方がいいことだと、
 わかってきた。

感想
 いよいよ時に役割分けをどのようにするかが、ここにはまだわからない。
 難しいことだと思いつつ、この班から出て意見交換する物品の移動や、
 整理の人はトイレに近いところから場所をとり、納得して、
 後で物品は集める。早く解決して、一所に集めたいと思はる。

感想
 遊戯する立場は広く、内容する。立場とエッセンスを
 何に上書き、おけ下し、人との実感+付けられた
 一人一人の状況や立場を考えた。ベストな選択をまだ
 は難しいことではありますが、それは多岐に亘る×総合で
 学んだ「人権と尊重する」とも関係していると思はる。

感想
 与えられた問題の解決方法は、思いついたものが
 ほとんど使えなかった。役割、役割を明確に、おぼろげ
 大目とわかりました。この場は、この場、最初、思いついた
 ばかりで、おぼろげ。

また話し合い活動に関しては、ゲーム内におけるグループから、意見交流を促進するために別グループを組み直して行った。

その話し合いに関する生徒の自己評価では、

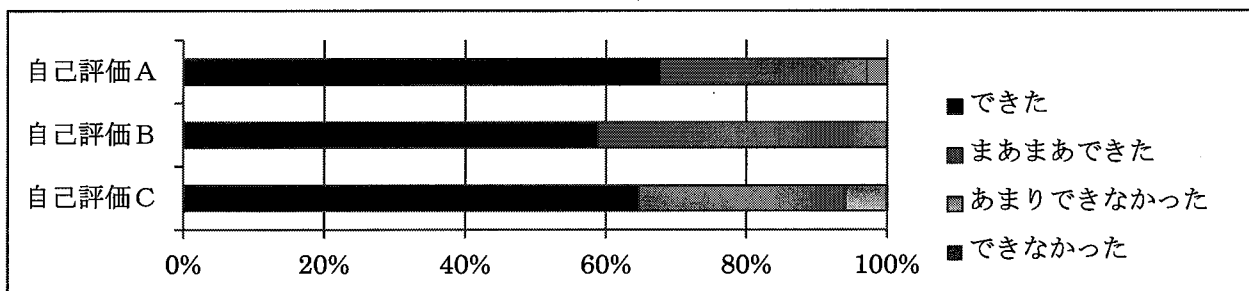
全員が意見を出すことができたのが 67.7%、まあまあできたのが 29.4%

全員が納得できる話し合いができたのが 58.8%、まあまあできたのが 41.2%、

全員で問題の解決ができたのが 64.7%、まあまあできたのが 29.4%

とそれぞれ高い割合を示しており、おおよそ公正に話し合いができていたと言える。(目標(ii)および(iv))

話し合いに関する自己評価 (生徒)



- 自己評価A……全員が意見を出すことができたか。
- 自己評価B……全員が納得できる話し合いができたか。
- 自己評価C……全員で問題の解決ができたか。

自己の生き方を考え、問題の解決に協同的に取り組む姿勢は継続的に取り組んでこそ達成される。今後もこうした公助につながる姿勢を涵養していく場面設定が求められる。

3. 成果と課題

「安全で安心して生活できる社会の実現」に対しては継続的に取り組まれるべきであり、螺旋型カリキュラムで学ぶことの意義は非常に大きい。小中高のそれぞれの発達段階を踏まえて総合的な学習の時間に取り組むことにより、主題に対して共通した視点を得ることができたことは大きな成果であった。また言語活動のマトリクスを通してコミュニケーションを意識することで、単なる知識、体験だけに止まらない取り組みとして、系統性を持たせつつ組み立てていくことが容易になったことも成果と言える。

一方課題としては、今回の取り組みでは各教科との連携があまり図られなかった点である。各教科で学んだ知識・技能の活用場として総合の時間を活かすことで、よりそれらは定着するはずである。同時に総合の時間での学習成果を還元することで、各教科に対する学習意欲が高まることが期待される。次年度以降、教科横断的な連携を促進していきたい。